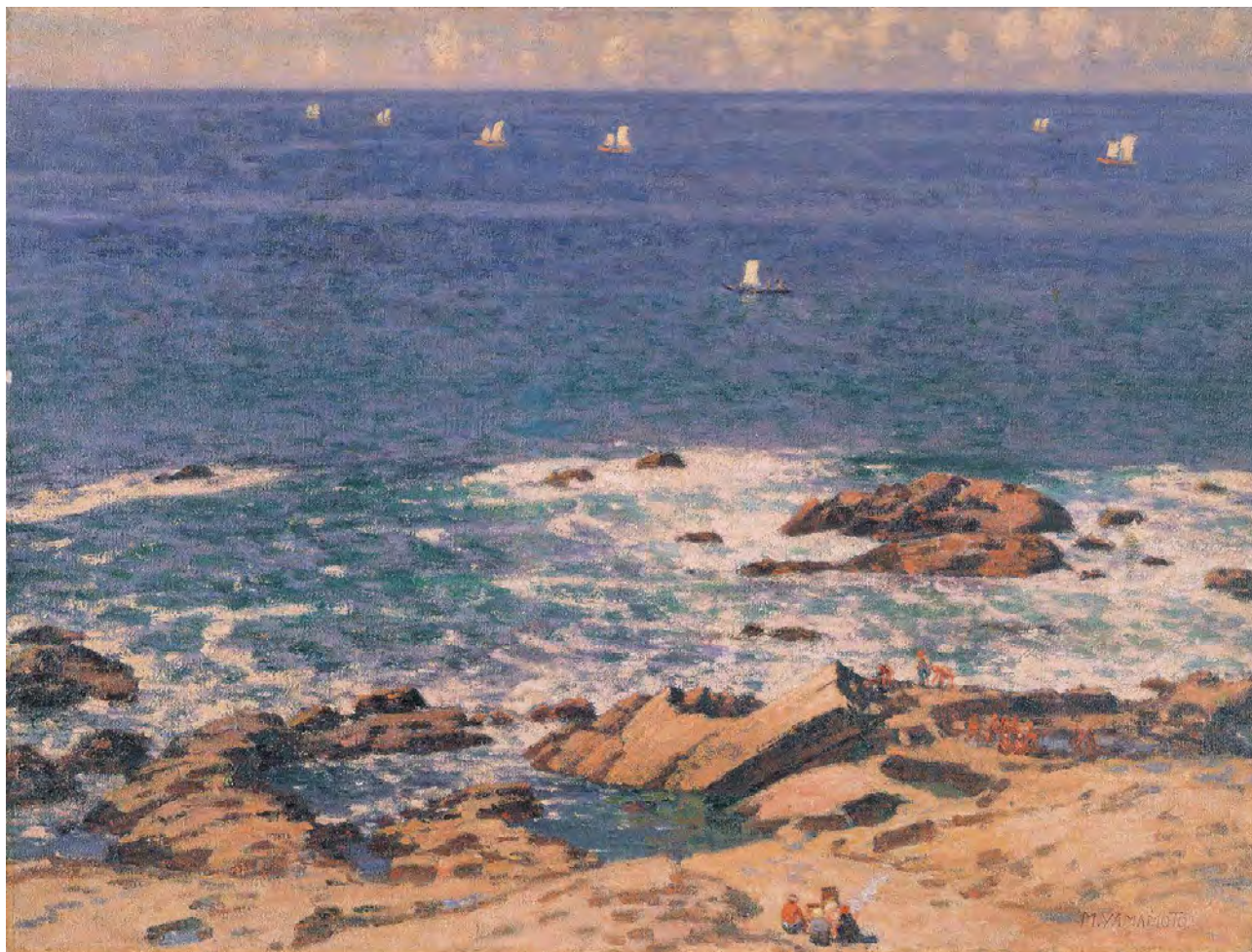


# アマリリス Amaryllis

静岡県立美術館 ニュース

THE JOURNAL OF SHIZUOKA PREFECTURAL MUSEUM OF ART



山本森之助（明治一〇年～昭和三年／一八七七～一九二八）  
《海岸》  
キャンヴァス、油彩  
六〇・七×八〇・五cm  
明治四五年～大正三年（一九二丁～一九二四）頃

光あふれる夏の海岸の情景を描く。影のほとんどない画面から察するに真昼の光景であるう。マットな絵具の質感と相まって、カラリと晴れた強烈な日差しを彷彿させる。画面全体の結構は思いついて水平線を高く取ったもので、海面の描写に注力する意図がうかがえる。浜辺の溜りの動かない水面から磯の岩場の細かな白波、浅瀬のエメラルドグリーン、沖合の鮮やかな青、潮目の水色の変化といった様子を細やかに追う筆のタッチは短く、海の波の律動感とうまくマッチしている。海岸で休息する人々のよく陽に灼けた赤銅色の肌もいかにも鮮やかである。

山本は長崎の生まれ。東京美術学校では黒田清輝教室に学び、白馬会、官展、光風会で活躍した。白馬会系の風景画家としていわば王道を歩んだ画家だが、主観的な風景描写に走らず、穏健で手堅い構築的な画面作りを特徴とする。

（上席学芸員 村上敬）

No.  
**134**  
2019年度 | 夏 |

# 展示室にいくつものミイラが並んでいたことについて

館長 木下直之

二年前の春、館長に就任して間もなく、某新聞社・テレビ局から世界中のミイラを集めた展覧会開催のお誘いがありました。その企画書を目にしてすぐに浮かんだ疑問は、あれっ、ミイラは美術だったかなということでした。

美術館を名乗る以上、展示されるものは「美術」でなければなりません。しかし、何が美術で何は美術ではないのか、これはそう簡単には定義できません。時代や場所が異なれば、人が求める「美しさ」は違うからです。

だから美術館では、絵画や彫刻ばかりでなく、衣服や装身具、さまざまな道具、あるいは住んだり働いたりする建物も美術と見なし、ファッション展、工芸展、建築展などを当たり前に開いてきました。譲れない一線は、展示すべきそれらは人のつくり出したもの、人の手が加わっているものだけというところでしよう。

ではミイラは美術だろうか。あとに遺された者たちが死者の姿を永遠に遺したいと望み、手を施し（最初の仕事の内蔵を取り出すことでした）、衣装をまとわせ、さらに美しさを求めたと

すれば、ミイラもまた美術の資格を有していそうです。死者の肖像が棺に描かれた古代エジプトのミイラがすぐに浮かんできますよね。それでもなお、棺や副葬品は美術ではあっても、布で何重にも巻かれた中身まで美術だろうかという疑問は残ります。

ミイラが生前は人であったことはいうまでもありません。しかし、死んだあともなお人でありつづけているのだろうか。いや、これは奇妙な問いかけですね。死んだら人でなくなってしまうとすれば、葬式など行う必要はないし、墓だっていりません。何よりも、死んで横たわっている人を目にして、それが人ではなくなったとは誰ひとり思わないでしょう。

すると、第二の疑問が生じます。人を美術館に展示してよいのか。日本の美術館の歴史を（博物館や博覧会も含めて）振り返った時に、この問題は古くて新しいのですが（一八七一年に東京九段で催された大学南校物産会に人の頭骨が動物の骨と並んで初めて展示されました）、わたしには切実な思いがあります。

一九九五年一月十七日に阪神淡路大震災が起きた時、わたしは兵庫県立近代美術館の学芸員でした。兵庫県警が美術館の展示室を遺体安置所にするよう求め、美術館がそれを断ったと知った時、美術館に遺体が並ぶ光景を想像もしていなかった自分が愕然としました。体育館はよくてなぜ美術館はダメなのか。美術館をそんなふうには聖域視してきたことを思い知ったのでした（拙著『世の途中から隠されていること』晶文社、二〇〇二年）。

もちろん亡くなったばかりの遺体とミイラは違う。安置と展示もまったく異なる行為です。ミイラを展示室に並べる理由は、それが人間の文化の所産だからですが、当の本人もそれを手厚く葬った人たちも、まさか後世に再び墓から掘り出され、博物館や美術館へと運ばれ、ガラスケースの中に展示され、多くの観客の目にさらされるとは想像もできないことのはずです。それは倫理的に許されるのかという問いが、近年強まってきました。

異民族や先住民の墳墓から発掘したものを数多く収集展示してきた欧米の

博物館に対してこの問いは真つ先に投げかけられ、それに応じてアメリカやイギリスで法制度（たとえばNative American and Graves Protection and Repatriation Act, USA, 1990 や Human Tissue Act, UK, 2004）が整えられました。日本ではずっと遅れ、アイヌ民族への遺骨返還訴訟や「人体の不思議一展（1996年から2011年にかけて全国巡回）をめぐってようやく社会問題化したという経緯があります。その結果、「人体標本の展示に関するガイドライン」（日本解剖学会、二〇一〇年）、「アイヌ遺骨の返還・集約に係る基本的な考え方について」（内閣官房アイヌ総合政策室、二〇一三年）などがまとめられました。

人間の文化に向き合う場となることが博物館や美術館の使命だと考えれば、人の展示を一律に不可とするのではなく、それらを展示する意義と倫理のバランスに配慮すべきです。

当館で開かれた古代アンデス文明展にも三体のミイラと四点の頭骨が展示されました。アンデスのミイラには埋葬後も取り出されてはメンテナンスを受けたものもあるようです。この一点を取っても、単純な埋葬と発掘の二分法が成り立たないことがわかります。それどころか、生と死、生者と死者という二分法すら成り立たない。まさしく人間の文化の奥深さを教えられたように思うのです。



# 熊谷守一 いのちを見つめて

2019年8月2日(金)～9月23日(月・祝)

熊谷守一（一八八〇～一九七七）の人と画業を紹介する展覧会は、当館では初めての開催となります。

熊谷守一は、岐阜県恵那郡付知村（現在の中津川市付知町）に生まれました。自然の豊かな環境で育った守一は、子どもの頃から絵を描くことが好きでした。東京美術学校（現在の東京藝術大学）を卒業した後、自然の中に身を置き、自らの感じるものを、平明で鮮やかな色面による作風である「モリカズ様式」で数多く描きました。

この展覧会では、守一の画業の全般を紹介しながら、とりわけ守一が愛した「花」「猫」「鳥」「虫」などをモチーフとした作品を展示します。これまでとは一味違った、熊谷守一の「小さないのち」を愛する、人間味溢れる展覧会になることでしょう。

さて、ここでは、出品作品の中から、三点の作品を紹介します。

まずは《ヤキバノカエリ》（図1）。この作品は、長女・萬の死をテーマに描かれた熊谷守一の代表作です。

一九五六年に開催された第二回現代日本美術展に出品されました。向かって右から守一、中央に長男・黄、左に次女・樫。この作品の残されたデッサンからは、人物の配置と距離感を緻密に割り出した跡が窺えます。最愛の子どもの死という現実を受け止め、火葬場からの帰り路という独自のテーマ

感を受け止め、火葬場からの帰り路という独自のテーマ



図1 《ヤキバノカエリ》1956年 油彩・カンヴァス 岐阜県美術館

で絵筆を取る。熊谷守一の子どもに對する深い愛情が表れている作品です。

つぎは《ほたるぶくろ》（図2）。

ホタルブクロは、平地から山地に広く分布するキキョウ科の多年草で、初夏に釣り鐘形の花を茎に多く咲かせます。そこに大きな熊蜂が動きを与えます。鮮やかな緑色の背景に、赤紫色の花、黒と黄、赤茶色をした蜂。実にシンプルな画面構成と綿密なモチーフの配置で、守一にしかできない独自の造形です。

最後に《朝のはちまり》（図3）。この作品は、最晩年の抽象的な同心円シリーズのひとつです。守一は、晩年、時刻や季節の異なる日輪や月を描いています。守一は、ギャラリ



図2 《ほたるぶくろ》1961年 油彩・板 静岡県立美術館

ームカイの向井加寿枝氏から「先生が見ていらつしやるものは、何かわからないが、ただの花や虫ではないような気がします。先生が見ていらつしやるもの、そして、ほんとうに描きたいもの、それを絵に描いてください」と言われました。そして後に描いたのが《朝のはちまり》でした。この作品は、守一本人にとっても、周囲の人にとっても、色彩や構図などの点で他の作品とは一線を画する異質な作品です。

この展覧会では、熊谷守一の初期から晩年までの代表作と日本画、書、素描、資料など約一六〇点を紹介しながら、皆さまに、いのちを愛でる熊谷守一の作品と人柄にふれていただきます。（上席学芸員 泰井良）

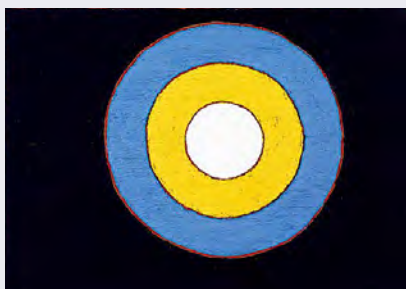


図3 《朝のはちまり》1969年 油彩・板 岐阜県美術館

## 平成三十年度 新収蔵品・寄贈作品の紹介

静岡県立美術館は、開館以来「東西の風景画」、「静岡ゆかりの美術」などを収集方針の柱とし、コレクションを進めてまいりました。収蔵品の総数は二六〇〇件を超えるまでになりました。

平成三十年度は、購入と寄贈により、日本画四点、油彩画二点、版画二点、ミクストメディア三点の計十一点を、新たに収蔵することが出来ました。ここでは、ジャンルごとにそれぞれの作品について、概要を紹介いたします。

### 【日本画】

日本画ジャンルでは、購入により一件、寄贈により三件が所蔵品に加わりました。

購入作品《名画集》(図1)は、江戸狩野派の画家五名が十六図ずつ描いた画帖。款記から天和二(一六八二)年頃の制作と判明し、安信が江戸狩野派を牽引していた時期の作品と考えられます。名所絵、物語絵

などの人気図様や吉祥的な画題が多く、当時の江戸狩野派の代表的な作品と言えます。

ご寄贈は、いずれも県内在住の二方から、卷子(断簡)一件、掛幅二件をそれぞれ頂戴しました。《輞川図巻》(明―清時代(十七世紀))は、唐代の詩人・画家である王維の別業の輞川荘を描いた中国絵画。輞川図



図1 狩野安信・常信・探信・益信・探雪《名画集》より 狩野探雪「海棠に鳩図」

は、古来より中国、

日本の絵画史上、

文人たちにとって

重要な画題と認識

され、輞川図巻の

拓本は、江戸時代

の日本絵画に大き

な影響を与えまし

た。山本梅逸《百

花鳥虫図》(天保

七(一八三六)年)

は、梅逸らしい清

新な彩色の花鳥画

で、多種多様な虫

の描写も見どころ

です。荒木十畝《蓬萊山図》(明治

三十七(一九〇四)年)は、堅実な

描法によって霊山を格調高く描いて

おり、近代の風景表現コレクション

が厚みを増すことになりました。

(上席学芸員 石上充代、野田麻美)

### 【西洋】

西洋ジャンルは、二件の古版画を購入しました。フランチェスコ・ピラネージの《今日、ポンペイの古代遺跡の中にある、イシス神殿の景観》と、イスラエル・シルヴェストルの



図2 イスラエル・シルヴェストル「バラティエーノの丘の皇帝宮殿」



図3 イスラエル・シルヴェストル「コンスタンティヌスのバシリカ」

《古今のローマの景観》(図2、3)です。ピラネージの作品については、前号の表紙をご覧ください(『アマリス』百三十三号)。ここではシルヴェストルについてご紹介します。この作品は、十七世紀当時の、都市ローマとその近郊に散らばる古代ローマの名所旧跡を描いた十二葉のシリーズです。小品ですが、古代ローマの様々な遺跡を、精緻な描写力と卓越した版画技術で捉えています。フランス生まれのシルヴェスト



ルは、若い頃にローマなどのイタリア諸都市を三度訪れ、その経験が、本作を始め、数多くの作品制作の重要な鍵となりました。ピラネージ、シルヴェストルともに、今秋開催する「古代への情熱」展に出品する予定です。

(上席学芸員 南美幸)

【日本洋画】

今年度の日本洋画の新収蔵品は、川村清雄《梅に親子雀》(図4)の一点を購入することができました。川村清雄は、幕臣の子息として江戸に生まれ、徳川家達に従い静岡に移住した、静岡県にゆかりの深い画家で、当館では二度回顧展を開催しています。

この作品は、川村清雄の支援者であり、作品コレクターでもあった加島虎吉(一八七一一一九三六/明治四一昭和十一)が所蔵していたものです。

梅に親子の雀が三羽とまっている様子を卓越した油彩で描いています。画面左側には、赤い色紙をしつらえて、その上に川村清雄自らが「千代々と千代よびかはすむら雀」と達

筆な文字を認めています。千代は、加島の妻・千代と掛け合わせたものです。この作品は、川村清雄が、加島夫妻の末長い多幸を願って寄贈したものだといえるでしょう。

(上席学芸員 泰井良)



図4 川村清雄《梅に親子雀》

【現代】

現代ジャンルでは、お二人の所蔵家の方から、計四点の作品をご寄贈いただきました。吉仲太造については、当館でもこれまで二点の絵画を収集しておりましたが、今回新たにコレクションに加わった《遺産》は、すでに所蔵している《現代美術》との関連性が強い作品です。新聞紙をコラージュした作品で、画面には洋服の型紙のフォルムが浮かび上がっています。一方、《赤い電話》は、まるで写真や映像のように電話機が写実的に油彩で描かれており、吉仲のカラージュ作品から次への展開を示す好例と言えます。

宮島達男の《Time Waterfall》(図5)は、縦長のLEDパネルの上に、大きさの異なる1から9までの数字が回転しながら、上から下へと繰り返

返し落ちていく映像が流れる作品です。数字は、宮島が一貫して表現してきた生命の連続性、循環のメタファーであり、東の間の生命の輝きが表現されているようにも見えます。

ジュリアン・オピエ《歩いているテナ》は、実在するモデルが歩く姿をアニメーションで描き出した作品です。余分な要素をそぎ落とし、人物の特徴をシンプルな線と色で捉えています。とりわけ身体のプロポーション、歩行時の姿勢や手足の動き、歩幅、リズムなどへの強い関心がかがえます。

(主任学芸員 植松篤、上席学芸員 川谷承子)

平成三十年度ご寄贈者様(五十音順)  
海野安弘様、太田正樹様、  
小山田佳穂様、鈴木寿夫様



図5 宮島達男《Time Waterfall》

# こすぎすぎむら 小杉楳邨と大仙陵古墳

—石本秋園《仁徳天皇陵出土甲冑縮図》をめぐって—

主任学芸員 浦澤倫太郎

今年、大阪府堺市、藤井寺市、羽曳野市一帯に残る古墳群のうち、四世紀後半から五世紀後半にかけて作られた四十九基が「百舌鳥・古市古墳群」として世界文化遺産に登録される見込みである。この中でも、宮内庁により百舌鳥耳原中陵として仁徳天皇陵に治定され、最大の前方後円墳として著名な大仙陵古墳は、宮内庁と堺市による共同調査が昨年初めて行われたこともあり、一層の注目を集めている。

本稿では、当館コレクション中の「小杉文庫」より、この大仙陵古墳に関係の深い、「仁徳天皇陵出土甲冑縮図」を取り上げ、江戸時代から明治時代にかけて活躍した国学者・小杉楳邨の、大仙陵古墳とその出土品に対する関心を中心に論じる。

楳邨は一八三四（天保五）年、阿波・徳島藩蜂須賀家の陪臣の子として生まれた。通称は五郎で、杉園と号した。地元では父や藩校に学び、後に江戸に上り、一八五七（安政四）年に紀伊藩邸内の古学館に入門し国書や歌文の学を受けた。一八六九（明治二）年、徳島藩が新たに設立した長久館の助教に着任。一八七四（明治七）年には教部省へ出仕し、以後東京で活躍する。一八八九（明治二二）年より帝国博物館に勤め、翌年には臨時全国宝物取調局書記兼監査掛となり、各地での文化財調査に従事する。その後は東京美術学校教授、東京帝国大学講師、御歌所参候などを歴任している。一九一〇（明治四十三）年に没した。研究領域は文学、考古学、美術史学、文献史学などにあたり、非常に広大であるが、研究手法は伝統的な国学の系譜に連なり、最後の国学者とも称される。故郷の歴史資料を集成した『阿波国徴古雑抄』（一九一三年）などを残し、様々な雑誌にも寄稿した。更に、膨大な書籍や資料を収集したことで知られ、自ら評議員を務めた好古社主催の好古会などに収集品を出品することもあった。



石本秋園《仁徳天皇陵出土甲冑縮図》  
紙本着色 90.3×42.2 1899（明治32）年

当館は、楳邨が収集した古文書、書跡、絵画、拓本、和歌短冊など三四七件を「小杉文庫」として収蔵している。これは静岡県森町の藤江家に伝わり、寄贈と購入により、当館開館以前に静岡県の所有となったものである。楳邨没後、旧蔵品は散逸し、現在は当館の他、国立国会図書館、国文学研究資料館、東京大学史料編纂所、東京国立博物館など各施設に所蔵されている。

当館小杉文庫の作品・資料の多くは楳邨所蔵時に軸装されており、軸には楳邨自身によるとみられる分類記号や番号を記した紙札が貼付されている。

これまで、重要文化財三件を含む古代から中世にかけての文書類、および江戸時代の書画を中心に、収蔵品展などで展示し、他館への貸出も行ってきた。しかし、大部分を占める近代の書画、拓本、和歌短冊などは、公開の機会が限られてきた。従って、その性質や来歴について、さらなる検討を要する資料も残されている。

石本秋園による《仁徳天皇陵出土甲冑縮図》もその一つである。本図はその名が示すように、仁徳天皇陵、つまり大仙陵古墳から出土した甲冑を描いたものであり、楳邨による賛が添えられている。その年紀から一八九九（明治三十二）年の制作であることがわかる。軸装で、外題には「仁徳天皇陵石礫発見甲冑縮図」と墨書され、その下に「雑九」と朱書きされた紙札が貼付されている。箱は付属していない。

画面中央に正面を向いた短甲およびその右手前に左側面を手前に向けた眉庇付冑を描く。両者とも、表面に緑青が生じて

いる様子が彩色により、鍍金の残る部分は金泥により表される。鍔の一つや眉庇の透彫など細部まで丁寧に描かれている。賛文は次のとおりである。

（画面右上）

明治五年九月はかり／御陵の南邊かたくつれせしをり古川躬行柏木政矩などともに／ひそかに拝観しつる御石礫中の御甲冑圖をかうやうに縮／写させてとし千五百年の御祭にならむとて一首をそふる。／其うた／かみつ世の高津の宮のたかくらに／あふくたふとし重き宝物

（画面左下）

この縮図石本秋園にかかせて高津宮の祠官／清原真弓にとり申させつる其下絵なり。紀念／のためにかくものしぬるは千五百年の御祭を／ものしたりし 明治三十二年三月はかり 楳邨 朱文円印「杉園」

画面右上の賛では、明治五年九月に古墳の南辺が崩れた際に、古川躬行と柏木政矩が見た甲冑を描いた「御甲冑圖」を縮写したこと、および今年が「千五百年の御祭」であること、および今年が「千五百年の御祭」であることを述べ、それにちなみ和歌を添える。

画面左下には、石本秋園に描かせ、高津宮の神職・清原真弓に納めた図の下絵が本図であると記す。そしてここでも「千五百年の御祭」を記念して描かれたことを述べ、明治三十二年三月の年紀を記す。

甲冑図の左下には落款らしきものが墨線で簡略に表されているが、これは本画におけるその位置を示しているとも考えられよう。

楳邨の記す「御陵」は、当時、仁徳天皇陵とみなされていた大仙陵古墳を指す。同古墳より一八七二（明治五）年に石棺が出土し、調査が行われたことはよく知られた事実である。同年の九月七日、前方部にあった石棺の傍からは、金銅製の短甲や眉庇付冑などの副葬品が発見され、その後、これらの遺物は埋め戻された。この調査に加わった柏木貨一郎



(一八四一年—一八九八年。名は政矩。鑑定家、建築家。当時は壬申検査に参加中)により、石棺および甲冑などの記録図やその写しが数本制作され、白描によるものが大阪歴史博物館、彩色されたものが個人(堺市博物館寄託)、八王子市郷土資料館に伝わっている。これらには短甲や肩庇付冑それぞれの全体図に加え、部分図も描かれている。

榎邸にとって、服制や武具は主要な研究対象の一つであった。この大仙陵古墳から出土した甲冑についても、本図制作の前後に、「上古の甲冑」(考古学会雑誌)第二編第四号、一八九八年)や「武器部類」(「好古類纂」第一集、一九〇〇年)で取り上げており、前者には肩庇付冑の略図が、後者には彩色図版が掲載されている。また「武器部類」では本図と同じく古川躬行(一八二〇年—一八八三年。国学者。当時は堺の菅原神社神職)と柏木政矩が大仙陵古墳を調査したこと、そして出土した甲冑に接し、いかに感激したかについても記している。ここで二人を「吾徒」と称していることから旧知の仲であったと思われる。

柏木による諸本の全体図と本図を比較すると、両者は同じ甲冑を描いている点では間違いない。ただし、短甲を正面から描く点は一致するが、肩庇付冑の向きは反対である。立体感の表現は、本図の方がより自然であり、庇の透彫など細部もはつきりと描かれている。榎邸や絵筆を執った石本秋園が、本図制作に際し、具体的に何を参考としたのかは不明であるが、単なる「縮写」ではなく、柏木による何らかの記録図を手本にし、更にアレンジを加え、本図や清原真弓へ納めた本画を制作したと推測される。

賛文後半に出てくる高津宮(大阪市中央区)は仁徳天皇を祀る神社で、その皇居であった難波高津宮跡に建立されたことに始まるという。「千五百年の御祭」は、仁徳天皇千五百年大祭を指すとみられ、当時の新聞記事によ

れば、本図の制作年と同じ一八九九(明治三十二年)の九月八日から十四日まで、仁徳天皇が崩御した仁徳天皇八十七年より千五百年を経たことを記念し、高津宮を会場に挙行された。斎主は本図にもその名が出てきた高津宮社司の清原真弓で、九日の正祭には師団長や府知事などが参列したという。また同年から翌年にかけて難波高津宮の旧址とされる場所には記念碑が建設され、現在も府立高津高等学校に残されている。

このような仁徳天皇に対する顕彰活動の一環として、古代の武具に詳しい榎邸に、大仙陵古墳ゆかりの甲冑図制作が依頼され、榎邸は画家である石本秋園にこれを描かせ、その下絵を手元に残したのではないだろうか。

最後に、この秋園にも触れておきたい。生没年は不明であるが、明治半ばから昭和初期にかけて活動したことが記録から確認できる。一八九五(明治二十八)年に榎邸が審査員を務めた美術育英会主催の蜂須賀家新築洋館室内装飾の図案審査会で秋園は「彩色山海図」で一等を受賞しており、少なくともこの時から両者に面識があったようである。そして、榎邸没後、残された取集品について報じる新聞記事では、秋園は榎邸の女婿と紹介されている。榎邸に実子はなく、養子は美二郎という男子のみであった。しかし、美二郎の妹の夫が石本姓であったことから、この夫こそが秋園であった可能性が高い。

出品歴を見るに、『子の日遊』(第一〇回美術研精会、一九二二(明治四十五)年)、『源氏物語』(第十三回異画会、一九二二(大正二年)など、大和絵系の画題を得意としたようであり、教材として用いられた掛図の制作を依頼されることもあった。東京大学駒場博物館が所蔵する旧制第一高等学校で用いられた歴史画掛図のうち、『寧楽朝時代貴公子之図』など秋園による図が五点存在することが報告されている。また、印刷物である関根正直撰

『昭和御大札掛図』(一九二八年)も図を秋園が手掛けており、その解説の表紙には「土佐派画伯 秋園 石本永平謹写」と記される。このような業績から有職故実に造詣が深かったと考えられる。

榎邸没後に出版された『歴世風俗女装沿革図考』(一九一一年)には、秋園が中世の絵巻等から抜き出した女性の図を描き、榎邸が各時代の女性の服装についての解説文を寄せられている。

以上の通り、秋園は榎邸と縁戚関係にあった可能性が高く、共同で著作を残した例もあることから、榎邸が絵画の制作や、資料としての模写の制作を依頼することも度々あったと推測される。

この『仁徳天皇陵出土甲冑縮図』は膨大な榎邸旧蔵品の一点に過ぎないが、榎邸の関心の対象や研究手法、そして交流関係の一端を示す興味深い作品と言えよう。

- 1 当館の「館蔵品目録」では、作者名が「石本秋園」、制作年が「明治三十三年」と誤記されている。
- 2 調査や絵図の作成の経緯については次に詳し。
- 3 このほか「有職故実」(早稲田大学三十七年および三十九年度文学教育講義録、一九〇五年、一九〇七年)でも取り上げられ、甲冑の略図が掲載されている。
- 4 「仁徳天皇千五百年大祭」(東京朝日新聞)一八九九年九月十二日
- 5 「高津宮址建表式」(東京朝日新聞)、一九〇二年二月十六日
- 6 「東京美術大学百年史 東京美術学校第一巻」、東京美術大学、一九八七年
- 7 「美術育英会審査図案懸賞金の贈与」(読売新聞)、一九一五年八月十五日
- 8 「小杉博士遺物の処分問題」(東京朝日新聞)、一九一七年三月十三日
- 9 人見圓吉・甲斐知恵子・齋藤艶子・能勢頼實・小杉榎邸(昭和女子大学近代文学研究室編『近代文学研究叢書』十二)、昭和女子大学、一九五八年
- 10 井戸美里「二高絵画の概要」(PDF)、東京大学駒場博物館



読者の皆様は、松平定信に対してどんなイメージをお持ちだろうか。「寛政の改革」を断行した定信は、儉約令、寛政異学の禁、出版統制令等の政策を行った、堅苦しい人物と思われがちだが、その実風雅の人であった。本書は、定信の芸術面の才能にも注目することで、新たな松平定信像を描き出した好著である。定信が編纂し、古画などの情報を全国から収集した『集古十種』の序は1800年に書されており、『集古十種』は、まさに19世紀の幕開けを飾る画期的事業であった。19世紀の江戸画壇を牽引した江戸狩野派や文晁一派は、定信周辺において、古画の模写を基礎とする自家様式を確立した。また、定信は晩年、自らが造園した浴恩園で、儒者や画家らと交友し、文化サロンを形成した。定信は、芸術面では、「寛政の改革」以後、より一層重要な役割を果たしたのである。

(対立と融和)19世紀の江戸画壇」展は、当館常設展示室で7月15日まで開催中です) (当館上席学芸員 野田麻美)

# 美術館のサポーターとして

前副館長 瀧 昌光

四月から「静岡県コミュニティづくり推進協議会」という団体に再就職しました。「コミュニティ」という言葉は、

最近、耳にすることが少なくなりましたが、昭和四十四年の国民生活審議会報告の中で初めて公的に示されたものです。高度経済成長による負の遺産(過疎化・核家族化・個人化の進展等)がもたらした様々な地域課題の発生を反省の上、「モノの豊かさからココロの

豊かさ」へ考えを改め、生活の場において人間性を回復していこうというものです。

当協議会は昭和五十四年に発足し、広報紙「コミュニティ静岡」の発行、リーダー育成のための講座開設、フォーラムの開催等の事業を実施し、本年度四十周年を迎えます。広報紙の取材で県下の活動事例を訪問する機会も多く、「歴史」「文化」「人物」「物産」など、静岡育ちの私でも知らなかった魅力的な地域資源がまだ眠っていると実感する毎日です。

県職員の立場を離れてみて、より一層、(ボーっとしていて叱られたことが度々あった)美術館勤務時代が懐かしくなり、木下館長をはじめ、お世話になった皆様に恩返しをしたい思いで一杯です。

今できることは、せっせと美術館に足を運び、固くなった頭を柔らかくすることが先決でしょうか。展覧会の広報も頑張ります！(また叱られないように)



「コミュニティ静岡」編集委員と笑顔で(後列右端が筆者)

## 利用案内

開館時間：10:00～17:30(展示室への入室は17:00まで)  
休館日：毎週月曜日(月曜祝日の場合は開館、翌火曜日休館)

## アクセス

- ◎JR「草薙駅」県大・美術館口から静鉄バス「県立美術館行き」で約6分
- ◎静鉄「県立美術館前駅」から徒歩約15分またはバスで約3分
- ◎東名高速道路 静岡I.C.、清水I.C.から約25分
- ◎新東名高速道路 新静岡I.C.から約25分

ウェブサイト：<http://www.spmoa.shizuoka.shizuoka.jp>

## 無料託児サービス

毎週日曜日および祝日10:30～15:30  
対象 6ヶ月～小学校就学前

※イベント等は都合により変更になる場合があります。

〒422-8002 静岡市駿河区谷田53-2

総務課/Tel 054-263-5755 Fax 054-263-5767  
学芸課/Tel 054-263-5857 Fax 054-263-5742



## 静岡県立美術館

Shizuoka Prefectural Museum of Art

つながる、次へ

## 「熊谷守一のちを見つめて」展 関連イベント・スケジュール

**特別講演会** [場所：当館講堂] ※申込不要・無料・先着250名様まで  
「熊谷守一の不思議 二つを一つに  
～例えば 日本画と洋画 あるいは 生と死」  
講師：古川秀昭氏(前岐阜県美術館長、OKBギャラリーおおがき館長)  
日時：8月17日(土) 午後2時～3時30分

**館長美術講座** [場所：当館講座室] ※申込不要・無料・先着40名様まで  
「熊谷守一の絵のはだかとヌード」  
講師：木下直之(当館館長)  
日時：9月15日(日) 午後2時～3時30分

**学芸員によるフロアレクチャー**(作品解説)[2階展示室]  
※申込不要・要観覧料  
当館学芸員が展示室にて、鑑賞者と対話しながら、解説します。  
日時：8月11日(日)、8月18日(日)、8月25日(日)、9月1日(日)、  
9月8日(日)、9月22日(日) いずれも午後2時より30分程度

**わくわくアトリエ** [場所：当館実技室]  
講師：福井利佐氏(切り絵作家)  
日時：8月4日(日)  
対象：小学生から大人まで(小学校3年生以下は、保護者と参加してください)  
※要事前申込、要参加費(材料費実費と必要な場合の観覧料)、定員制

**実技講座** [場所：当館実技室]  
講師：渡辺有葵氏(画家)  
日時：9月7日(土)～9月8日(日)  
対象：中学生から大人まで  
※要事前申込、要参加費(材料費実費と必要な場合の観覧料)、定員制

**ちよこっと体験** [場所：当館エントランス]  
ぬり絵ワークショップ「熊谷守一になろう」  
日時：8月21日(水)～25日(日)10:00～12:00,13:00～15:30  
対象：どなたでも  
申込不要、参加費無料

※各イベントの詳細は、ウェブサイトまたは館内配架チラシをご覧ください。

友の会のご案内 入会は常時受け付けています。会員特典など詳細は、友の会事務局(Tel.054-264-0897)にお問い合わせください。